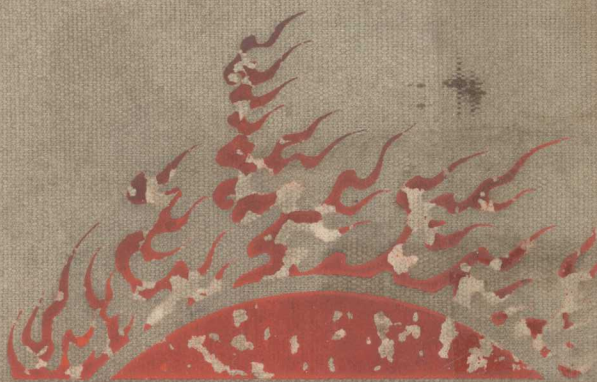


時代



おれん

大正十二年三月三日
大正十二年三月六日
大正十三年二月十日
大正十三年四月十日
發行
刷
三十版
三十一版

第一卷奧付

定價金貳圓六拾錢



時 代 相

著者兼
發行者

東京市下谷區下根岸

村

印刷者

東京市小石川區久堅町

石 塚 市 郎

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

株式會社博文館印刷所

發行所

東京市下谷區下根岸八十二番地

電話 下谷六三〇九番

時代相刊行會

發賣所

東京市日本橋區本石町三丁目

電話 大手一二三六番
振替貯金口座東京一七四四番

至誠堂書店

發賣所

東京市日本橋區本正町九番地

電話 本局六八四番
振替貯金口座東京四五五四番

明文館書店

時代相

タタ

人類に斷じて平和なし、平和は休戦にして、加之も血を見ざる休戦中は他の方法によりて間斷なく戦ひつゝある事、なほ一週間に一度の日曜あるが如く、これを安息日と稱して心身を休するは、休するにあらず、ほつと息を吐くだけに止まり、息も吐けざるものは常よりも却つて作戰計畫に忙がしく、うかくすれば油斷大敵に襲はれて、休日なるが故に寧ろ案外の深瘡を負ふものあり、昨日の日曜に奢らされたといふ手疵ぐらゐるは今日の社會、よほどの幸福ものなり、

まして自ら今日は奢ると極めて出る息吐き連中、その日曜を幸ひ、おの／＼分相應の休戦面を秋の小春日和に曝して、それ／＼四方の遠近へ心のまゝ一日の苦を忘るゝ中に、東京驛より鎌倉驛へ吐き出されし四人連は、いづれも見苦しからぬ輕快の背廣服に口髻のないものは只一人、年輩また殆ど揃うて四十の上を二三年、多くて五六年、これを世間の一口に紳士といへど、いはゆる知識階級の紳士部にして、もし生活上の對照表を作れば、ヒヨコ／＼人に押されながら狼狽へて改札口を出る赤切符の田舎阿爺よりも遙に哀れなる人かも知れず、されど人はバンのみに生きざる事を多年の顔面に誇り馴れて、加之も今日は久しぶりに骨身を伸ばせし心地、たしかに一寸ぐらゐの身長を増せしかと思はるゝほどの意氣揚々に鎌倉山の松の梢を仰ぎながら、

「おい、どこへ行かう、まさか御大の別荘へ押掛けて官費酒も飲めないからねエ、第一あの古い頭で、また例の講釋を聞かされては堪らないよ、はゝゝゝ」

「無論さ、今日は一切お互に役人根性を廢して、どうだ、すまじきものは官仕へ流で、昔

の學生氣分を大に發揮したいね一

「よからう、一種の若返り法として、ウンと遣るべしだが、儲、かうして顔を見ると、いつの間にか年を取ったなア、役所へ出れば大臣あり次官あり、家に歸れば妻あり子あり、この鎌倉も氣樂蜻蛉の角帽で暴れ廻った時代が懐しいよ」

「感慨無量も宜いが、さう悲哀に傾いては困る、どツかで愉快に飲んで愉快に語らう」

右への海岸電車を背後にして鶴が岡の八幡宮に向ひ、ぶら／＼秋日和の松影を心地よく、ステツキの尖端に道芝を叩き小石を轉がしながら、

「かう四人とも同じクラスから出て、多少の遅速はあつたが、現在また同じ官途の局長級に揃つてるといふのは、まづ好い方だぜ、一步、出發點を間違つたがため、いまだに下宿屋を渡り歩いて殆ど自暴半分の放浪生活を常としてるものも、あるからね」

「ところが下手な轉業師のやうに幾度か落ちて三四年も後れながら、やう／＼四／＼這ひに這ひ出した奴で今日、實業界の立物になつたり政黨の花形になつたりしてるのもあるか

ら、我々の今日は好いか悪いか分らないよ」

「さういふ議論は別として、今日の官途に於ける我々局長は六百年以前この鎌倉時代で全體、どの邊の位置に當るだらうね、まさか、名もない雑兵端武者でないだけは確實だが、ちよいと暇に調べて見ようぢやないか」

「面白い、調べて見ようが、さしあたり我輩の考へでは、多數の屬官を平侍として局長の椅子は侍大將といふところだね、天下太平の徳川時代に大老が大臣格で我々は勘定奉行とか寺社奉行とかいふ町奉行以外の奉行級だらうよ、鎌倉時代で侍所の別當となれば、和田義盛だが、義盛としては少々お互に弱過ぎるぜ、はッはッはッ」

「なアに個々の人間力よりも時代力の配合で、もし和田義盛を今日にあらしめたら陸軍の佐官級かも知れないよ、加之も年輩は目下の軍縮を待つまでもなく現役を疾の昔に去つて、家賃の安い巢鴨か柏木邊の外れで僅の恩給に餘命を保つといふ境遇だね、流石の右幕下頼朝も今日の議會で攻められたら、恐らく總理大臣として三年の内閣維持は難かし

からうよ、我々だつて戦國時代に引直せば一城の主人で、太平の世には殿様だよ」

「はゝゝゝ時に家來も召連れぬ殿様お忍びの御徒歩で、この御四方、これから何處へ入らせられようかね」

「さア、何處といつて時節柄、近來は東京でも謹慎勝の方だからね、まして鎌倉遠征に馴染の料理屋も何もない、足の向き次第と目に付き次第、どこでも這入らう、今いふ通り殿様お忍びだから」

「はゝゝ學生氣分になつたり殿様氣分になつたり、これが好いね、迎も省内で味ははれないこつた」

「その外に何か味はツて見る氣はないかね」

「あるさ、あるには、あるが、味はツて見たところで十年お互に年を取り過ぎてるよ、これでも昔は人生の總てを戀だの愛だのと夢中になつて騒ぎ廻つた事もあるんだから呵しい、はゝゝゝ」

「ところが、いつも戀愛の半成品で相手を夢中たらしめるだけの面も金も此方に具備して居なかつたから今日、お互に無事なンだぜ」

「その點には四人とも始めから頗る無事過ぎた方だよ、いくら此方で騒いでも、お向ふ様か少しも危険區域へ引ツ張り込まなかつたからね」

笑ひながら語りながら歩みながら、的もなく鳥居前を左へ廻らんとせし出合頭に、ひよこりと現はれしは二十三四の女、さのみ美人ならねど、くつきりと色白の愛敬もの、四人の中の一人を目早く認めて小腰を屈め、

「おや、高松様、まアお珍らしい事」

あとの三人、おもはず口を揃へて、

「やア、やア、鎌倉にも危険區域があるぞ、高松、どうする」

ぶら／＼と的なしに歩きし鎌倉の四人連れ、おもはぬ不意の女が手引となりて要山の香風園に流れ込み、自然の山蔭に對ひし奥の小座敷に落著きながら、さしあたり高松といふ一人、

どうしても一應の辯解必要、

「なアに、あれはね、東京の或待合に居た女中で、此方は顔も名も忘れて居るんだが流石に家業柄、何處でも一目に見通さないもんだね」

「や、それで嫌疑は晴れた」

「あれで嫌疑を蒙ッては我輩、大に不満足だよ」

「だが、ちよいと女並の顔たぜ」

「女に違ひないものを女並は酷い、向ふで見ると我々は、男並の顔になツて居ないだらう、はゝゝゝ」

「そりやア比較上の當を失してる、女は美を生命とするもんだから、ちよいと見て綺麗な位では逆も美人級に這入らないが、男は容貌以外に男たるの意義を有してるから、さう我々は男並に缺けて居ないよ、いはゆる野の花は目に映じ易く今の女も鎌倉で見るから女並だが、東京ちやア問題にならない」

「問題にしないで、宜からう、は、は、は」

「だがね、大きな聲で胡坐を掻いて、こんな馬鹿口を聞けるのは、やはり鎌倉だよ、威厳も態度も、あつたもんじゃない、は、は、は」

「これが人間の赤裸々を現はしたところだ、髻を捻つて局長室に納つてゐる間は、神様の目から見ても一種の偽りかも知れない、もし職に忠なりとする事實あれば、寧ろ趣味からだね、わづかの報酬で苦心慘憺の刑事が日夜に飛び廻つたり生命を賭して強盗の兇器に向つたりするのと同じ心理状態だよ、つまり誇らんがために力めるのさ」

「趣味でも誇りでも立派に仕事を舉げて行けば宜い」

「そろ／＼官臭的の議論めいて来たぞ、約束が違つてゐる、昔の學生気分になる筈だ、さア理窟ぬきで大に飲まう、大に脱線しよう、但し脱線は女禁制の脱線として、この女中も呼ぶまい、盛に稚氣を帯び野暮を發揮して、どし／＼酒と食ふものを運ばせ、盛に牛飲馬食を遣らう、酌なンか、ぐい／＼手酌だ」

「年輩上、境遇上、さう度々、やれないこつた、やるからには徹底的に遺憾なく唄ッて踊らうぢやないか」

「かういふところを新聞記者に見せたいね、好い種だぜ」

「新聞記者よりも第一この家で我々を何と鑑定するだらう、よほど怪しい連中だよ」

「今の女が高松君を知ッてる以上は略、わかッてるさ」

「略の程度で、わかるぐらゐは構はン、官吏は宗教家でも教育家でもないからね」

「近來の宗教家や教育家が當になるもんか、また警部巡查が管轄地域でサーベルを下けながら踊るのは違ッてるよ、まして女禁制の神聖だ、やるべし、やるべし」

「つまり今日の我々は、押入の蒲團を出して日光に乾すのと同じ理窟だ、衛生上、をりく必要だよ」

「ところで現在の地位は、木綿夜具だらうか、絹夜具だらうか」

「まだ縮緬や緞子とは行かないね、だが木綿ぢやアない、まア銘仙か紬ぐらゐだらう」

官吏くわんりとしては寧ろ官吏くわんりの匂におひ薄うすく、穴熊あなぐま的てきの刀筆根性たうひつこんじやうを脱だつして聊いさか省外しやうわいの空氣くきに觸ふれたる四人にん、なつかしき昔むかしの學生氣分がくせいきぶんに若返わかがへりて飲のむ事こと、食くふ事こと、饒舌じやうぜつする事こと、中なかにも高松剛三たかまつかうざうは局長きやくちやうとして最ももつと若わかき新進しんしんの氣焰きえん家か、醉よへば猶更なほさらの活氣横溢くわつきわういつ、もはや飲のむだけ飲のんで床柱とこはしらに大胡坐おほあぐらの背せを持たせながら、

「かうなツて、かうしたところは役所やくしょの椅子いすと、よほど凭もたれ工合ぐあひが違ちがつてゐるよ、實じつは我輩わがまい、官臬くわんしやう紛々ふんふんに飽あきた、官吏生活くわんりせいかうといふものは結局けつきよく、人間にんげんの自由じゆうと人間にんげんの力量りきやうを封ふうじ込まれた覺悟かくごでないと、勤つとまらないもんだね、まだ野やに下くだるといふほどの朝あさにも立たつて居ゐないが、此このま、長ながく給料取きで居をらない考かんがへだ、どうだね諸君しよくんは、段々だんぐに變かはつて來るといふ微び溫ゑん的てきの變かはり方かたでなく、今いまに急轉直下きふてんちやくか、がらりと音おとのするやうな時代じだいの變遷へんせんが我々われ々の頭上づひやうにも響ひびいて來るぜ」

例れいの如ごとく天井てんじやうを仰あふいで大聲おほこゑに高笑たかわらひするかと思おもへば、今日けふは聊いさか頭かうべを垂たれて兩腕りやううでを固かく組くみながら、

「その時、あつと驚いて腰をぬかすものが多からうぜ、前途、ますく官吏の悲哀を感じるね」

時と處によりては、棒を呑んだやうにならねば威厳なしといはるゝ四人の局長連、今日は一日の官臭を洗ひ落して、なつかしき昔の學生氣分に若返りながら、牛飲馬食の快談にも聊か饒舌り草臥れし中に、獨り高松剛三の氣焰ますく冴えて、

「今いふ通り、我輩は此まゝ長く官吏といふものゝ悲哀を味はつて居れないよ、前途生活の不安は強ち官吏に限らない世の中だから、たゞ單に報酬の貧弱を論ずるんでないが、考へて見ると馬鹿々々しくなるね、君等だつて實際、自分の心の底を正直に叩いて見給へ、現在の境遇には満足して居まい、叩けば必ず現在の境遇以外に何等かの平生に變つた音がするだらう、今日は昔の學生氣分になる筈だから、まづ學生時代を喚起すとして現在、どんな感じがする、お互に中學の五年、高等學校の三年、大學の三年、以上の滿十一年を五番と下らず兎も角も秀才とか何とかいはれて來たんだぜ、もう今は廢された

が、四人とも恩賜の銀時計で帝大を出たンぢやアないか、おまけに四方から引ッ張り風になつた前途有望の青年だ、それが不思議に揃ッて官途に就き、多少前後の遅速はあつたが、今日また不思議に局長級に揃ッてるといふのは、他から見ても或は不幸でないかも知れないが、今日こゝまで来るには君、十四五年も掛ッてるぜ、加之も今日の役人としては勤勉も能率も人に譲らず清廉潔白を事實に行ひ事實に現はして來たぜ、その我々が此まゝの先を考へて、どうなると思ッてる」

床柱より背を離して片手を伸ばし、徳利の首を鷲掴みに引寄せ、ぐいぐと咽喉を鳴らしながら、三口ばかりの漉呑み、

「漢學流でいへば宿昔青雲の志だ、ぬら／＼鰻上りでなく潑刺たる鯉のやうに跳ね上ツて一番、大に自分の理想を行ひたいと思へばこそ、この十四五年もコツ／＼と神妙に違ツて來たんだ、ところが近來の工合を見ると、無効だね、もう休ンぬる哉だよ、いくら氣張ッても働いても、お互に局長級が出世の行止りだ」

「なぜ、どうしてだ」

「おい高松、意氣地のない事をいふなよ、君にも似合はない」

「我々の出世は、これからぢやアないか」

高松剛三、また一本の徳利を片手に引寄せて耳を傾け横に振りながら、残りの冷酒、ぐいと呑み、

「君等ア三人とも、天下太平に出来てるよ、局長が次官となり次官が大臣になると思ッてるから、さういふ暢氣な事がいへるんだ、考へて見ろ、時代の舞臺は廻轉して、政黨政派の世の中だぜ、やツとの思ひで、こゝまで漕ぎ付けた我々の頭へは、だしぬけの不意に飛入が遣ッて来て、子飼から役人育ちの貴様達、そこで止まれといふ號令が出るんだ、無論、政黨内閣の今日に於て何等の異議も不思議もないが、我々の上に座を占めるもの必ずしも立派な政治家ばかりといへるかね、つまり心持よく服従して働ける人物のみとはいへまい、中には随分、あやしい先生が多いぜ、たゞ政黨政派に籍を有するだけの事

で、とんでもない野武士が飛び込んで来るからなア、ところで此方は糞真面目に馬鹿正直に多年の経験と多年の勤勉を積み上げて實際の實務に當って居ながら、うか／＼すれば君、その野武士に此首を、ちよ／＼切られるんだ、此奴、聊か首骨が硬いと睨まれて、邊鄙の知事にでも抛り出されたら、それが最後で官海の溺死だ、役人の土左衛門だよ、は／＼／＼うまく首が胴に著いて往つたとしても、よ／＼／＼の阿爺になつて貴族院の片隅へ葬られる位が關の山だ、もう山が見えたとは君、かういふ事をいふんだぜ」

聊か呆れ顔に目を見合せし三人に向ひ、高松剛三、ます／＼力強く膝を乗り出して、もはや口だけでは溜飲が下らず、右の拳を固めて宙に振りながら、

「面白くない、大に面白くない、向ふから来る奴が面白くないばかりでなく、大體また今の我々官吏仲間に度胸の据つた、智慧の生きた、腕の利いた奴がない、蒲鉾のやうに魚の正體を失つて寸法の極つた板の上へ平張り付いたまゝだ、ひツペがして切られたり喰はれたりするまで、ぐうの音も出ず、じつとしてやアがる、ところで、この我輩が今日